

宗教改革500年

院長
梅津順一
UMETSU Junichi



今年、1517年10月31日に、マルティン・ルターがヴィッテンベルク市の教会の扉に、95個条の提題を張り出してから500年、宗教改革500周年を記念する年に当たります。中世のキリスト教はローマ・カトリック教会と東方正教会に二分されていましたが、宗教改革とともに、プロテスタント教会がローマ・カトリック教会から分離し出現することになりました。

ローマ・カトリック教会と東方正教会が、地域的に見ればほぼ西ローマ帝国と東ローマ帝国に対応するよ

うに、大まかに言って、ローマ・カトリック教会はイタリア、スペインを中心とする南ヨーロッパ、プロテスタント教会はスイスを含むアルプス以北の地域で受け入れられたといえます。また、プロテスタント教会はドイツのルター派教会、英国教会、スコットランドの長老教会など、国や地域ごとに国民（地域）教会としてスタートしました。

宗教改革の世紀は、ヨーロッパ諸国がアジアやアメリカへと世界的に拡大する時代でもありました。スペイン、ポルトガルが勢力を拡大した

中南米諸国がローマ・カトリック教会の牙城となり、北米をはじめとして旧イギリス植民地がプロテスタント教の支配的地域となりました。とくに、アメリカ合衆国は、政教分離を徹底させて、カトリック教会も含めて、プロテスタント諸教会の自由競争の地となり、活発な伝道活動が展開されました。

西欧世界から見れば、東のはずれ、極東の地の日本にも、宗教改革の影響とその余波は及んできました。海上より日本にキリスト教を最初に伝えたのは、イエズス会の指導者フラ

ンシスコ・ザビエルですが、イエズス会はポルトガルの支援を受けた宗教改革に対抗するカトリック教会の運動でした。当初、織田信長はじめ一部の戦国武将がキリシタンに好意的態度を示したのですが、豊臣秀吉以降は、その政治的野心への警戒感から禁制に乗り出します。

キリシタン禁制は秀吉から徳川幕府に受け継がれますが、その一因として、プロテスタント国オランダが、フィリピンを拠点としたスペインとカトリック教会の侵略的野心を幕府に告げ口したことが挙げられます。

オランダ共和国はスペインの圧政から逃れて独立、東インドに進出したのですが、キリシタン武將天草四郎時貞に率いられた島原の乱では、幕府の要請に依って、幕府側に加わっています。これは16世紀ヨーロッパ各地で戦われた宗教戦争の再現ともいえます。

19世紀の半ば、日本はペリー提督率いるアメリカの4隻の黒船、東インド艦隊の砲艦外交によって開国を余儀なくされたのですが、カール・マルクスがこの日本の開国とサンフランシスコ郊外での金鉱の発見を、世界市場成立の一里塚と指摘したことは有名な話です。確かに、ペリー提督の黒船は蒸気船、すなわち産業革命を推進した蒸気エンジンを船舶に実用化したものでした。日本の鎖

国時代は、西洋世界では近代世界の成立があり、政治的には市民革命による近代的な政治制度、経済的には資本主義経済と産業化が羽ばたいた時代でありました。

資本主義経済の勃興、市民革命の成立を近代社会の指標としますと、その動きは西洋社会に一樣に進んだ

のではありません。イギリスでは絶対王政は、17世紀半ばのビュリッタン革命から名譽革命によって打倒され、下院を中心とする議会政治が定着していきました。19世紀のプロテスタント新興国アメリカは、民主主義であり、自由な経済であれ、近代社会の推進者であり、他方、カトリック教会が強固に支配したイタリア、スペインでは、政治的混乱と経済的停滞が続いていました。とすれば、近代社会の成立に対してプロテスタントイイズムの積極的な影響があったのではないのか。

この問題を本格的に論じたのは、19世紀末から20世紀初頭の二人のハイドルベルクの碩学、神学者のエルンスト・トレルチと歴史社会学者マックス・ヴェーバーでした。ヴェーバーが「プロテスタントイイズムの倫理と資本主義の精神」の関係を問題としたのに対して、トレルチは人権と良心の自由、学問、科学、芸術の分野に至る多方面の分野に即してプロテスタントイイズムとの内的関連を検討しています。

西洋近代におけるプロテスタン

ティイズムの要素をどう評価するかは、明治日本においても重要な問題でした。幕末から明治初年にかけて、徹底した西洋化モデルを追求したのが、『学問のすゝめ』の著者福澤諭吉ですが、彼は従来の和漢の学問ではなく、実用的な新しい学問、洋学への切り替えを勧めています。では、西洋の宗教であるキリスト教、とくにプロテスタントイイズムをどう捉えたらよいのか。

さすがというべきか、福澤は『文明論之概略』で、宗教改革の意義について触れています。福澤も西洋の近代化、当時の言い方では文明化と「宗門の改革」が並行して進んでいることを知りつつ、宗教は「文明進歩の度に従ってその趣を変ずる」ものであると考えました。つまり、文明化、主として智識の進歩によって、「宗教の儀式を簡易に改め、古習の虚誕妄説」を改めたのが、プロテスタントイイズムだと考えたのです。

これは福澤の独創というよりも、当時の文明史家ヘンリー・トーマス・バッケルに学んだものです。文明、とくに知的進歩こそが主導的役

割を果たすのであって、宗教は受動的地位にあると考えたわけです。とすれば、日本は文明を学ぶことは必要だとしても、文明の宗教を受容することは必ずしも必要ないこととなります。これは今日に至るまで、宗教嫌いな知識人が好んで受け入れる立場といえます。

ただし、これはカトリック教会の抑圧と戦ったフランス啓蒙思想の立場で、英米の啓蒙思想は必ずしもそうではありません。スコットランド啓蒙であれアメリカ啓蒙であれ、プロテスタント教会とは親和的で、ハーバードもプリンストンも、神学校から出発しています。これは神学校とは無縁な慶應義塾と、神学校から出発した青山学院の違いでもあります。

知性は宗教との緊張関係がなくならず、暴走することはないのか。知性に対する敬虔な心の役割はどうあるべきか。その今日的な意味を探ることが、本学院にとっては建学の精神を生かすことであり、宗教改革500周年を記念することではないでしょう。